石井陽一先生へのエール

青木康征

昭和四十年冬、とある書店で一冊の訳書に目がとまり購入した。書名は『イスパノ・アメリカ　二十世紀の歴史的緊張』（鹿島研究所出版会）。ぱらぱらとページをめくったものの、難解で、すぐに放りだした。翌年、学部を卒業したわたしは機会に恵まれマドリッド大学でこの訳書の原著者の授業をうけることになった。最初の授業で「わたしの本は日本語に訳されていますが、君は知っていますか」と聞かれて、「ええ。たまたま見つけて買いましたが・・・」と、あとの続かないしまらない返事をした。マドリッド大学文学部中南米史科のバリバリの教授であった先生の名はマリオ・エルナンデス・サンチェス=バルバ、実存主義者スビリを愛し、独特の造語を駆使するラテンアメリカ史の熱い大先生である。その先生の著書を翻訳されたのが西俣昭雄氏と、若き日の石井陽一氏であった。この訳書について当の石井先生にお聞きしたところ、同書は、昭和三十六年、先生がマドリッド大学政経学部に留学されたときのテキストだということであった。ラテンアメリカに関する研究書がほとんどなかった当時、このよ

うな濃密な書の翻訳をいちはやく企てられたことは、同学の士のためであるとともに、先生ご自身の渇きをいやすためでもあったのだろう。

このように、同書を介してお名前はすでに存じていたわけであるが、石井先生とは神奈川大学外国語学部スペイン語学科の後輩スタッフとして教員生活をご一緒させていただくことになった。まだまだ騒がしさがつづく時代も、その後も、つねに、本学における教育と研究環境の向上のため、また、大学財政の健全化のため、その実務的見識にもとづき積極的に提言されてこられた。大学の経営と表裏一体のものとして教育の質が従来にも増して問われるいま、名誉教授としてひきつづき助言くださるようお願いするところである。

先生が担当された科目は「ラテンアメリカ社会」「法律スペイン語特講」「ラテンアメリカ社会ゼミナールⅠ、Ⅱ」、一般外国語としての「スペイン語」などである。いずれも先生が本学に奉職される前から育ててこられた専門分野である。ラテンアメリカの社会という広範多岐にわたる事象に旺盛な研究心を傾注し、政治・経済・法律面から問題意識にみちた執筆活動を展開されてきた。その成果のひとつが近著『麻薬戦争　南北アメリカの病理』（創樹社）である。麻薬問題の根っこにある土地問題は先生の主たる関心事項で、今後さらなる研究の進展を期待している。わが国におけるラテンアメリカ研究の第一世代に属するといえる先生であれば、師なき道を歩む苦しさと楽しさを同時に味わう毎日であったと推測される。先生が主宰されたゼミナール誌「地平線」のように、これからも、地平線の向こう、水平線のかなたにあるラテンアメリカの生の鼓動を感じつづけてほしい。古稀を迎えてもますます健康な先生であれば、こそ。アントニオ・マチャードの言葉をお贈りします。Caminante, no hay camino. El camino se hace al andar.　感謝。